

教育上の課題と工夫

思い起こせばコロナ前の医療施設では新生児を含む小児の病棟において、看護師が「マスクをしない」ことの意義は周知の事実であった。ヒトの新生児は生後すぐからヒトの顔への認知機構が発動する、乳児後期に見られる知らない人への泣き（fear of strangers：人見知り）は世話をしてくれる限られた大人への愛着の形成を意味し、言葉の獲得途上にある幼児は自分の信頼する大人（主に親）と知らない人物とのやり取りの間であって親の様子を感じ取り、知らない人物が自分の敵か味方かを判断する（social reference：社会的参照）。このようなヒトの認知・情緒・対人関係の発達への理解が小児看護の知識の基盤の一つである。よって小児病棟の看護師は感染対策上必要がなければマスクをせず、表情や声色、身振り手振りを豊かに使い、子どもに接してきた。担当している生涯人間発達論の子ども期の授業回（5～8回）ではボウルビィやピアジェなど発達心理学の重要な知見が看護にどのように活かされているか、1年生がイメージしやすいよう、末娘の育ちと共に意図的に撮りためた日常の動画や先輩たちの実習エピソードを交えて授業をしている。

コロナ下に教員が身につけた教育スキルの一つに遠隔授業がある。後学期は3年次の小児病棟実習と生涯人間発達論の授業の重なりを解消するため一部をオンデマンド授業とし、事後テストで学生の学習状況を把握している。今年度もちょうど第6回がそうであった。この回には2本の短いこどもの動画を含めており、事後テストで「スライド8の動画に登場する1歳11か月児のコミュニケーションの特徴を記述しなさい」などと問われる。「『これは？』と人形を指さし年長の子どもにくりかえしたずねる」「女性のフィギュアは全て『ママ』と言い、モノの分類や語彙が増える過程にある」など様々な回答があるが動画から読み取れる範囲であればゆるく正答にしている。しかし今年度は「『う～あ～』など母音を発している」「『ワンワンキタ』など二語文を話す」など明らかにこの授業に登場しない場面の回答が散見され、正答率は例年に比べ随分低くなった。目視で丸付けをしながら彼らの学習態度への不信感に重なって、今年も使っていないよ、と許可をくれた娘の笑顔が頭をよぎる。小児病棟の実習で、体がつらい中でも実習生の受け持ちを承諾してくれるこどもと家族に彼らは学習で応えられるだろうか……。1週間後の授業の冒頭でオンデマンド授業の正答率の経年比較と看護教員としての気持ちを率直に伝えた。

コロナ禍の教育活動を振り返って

その後、数名の1年生と話す機会があり彼らの学習態度は幅のあるグラデーションのように推測された。振り返れば、彼らが高校へ入学したのは2020年、新型コロナウイルス蔓延により高校は春から臨時休校となり、休校が明けてもマスク、衝立、コーラスや運動など呼吸が荒くなる活動の自粛、部活動の大会中止、修学旅行や留学の規模縮小と、先が見えにくい3年間を過ごしてきた。予測しにくく、一貫性に欠ける子育てはこどものやってみようという勇気や自立心を妨げることがわかっている。一貫した教育的態度、安心できる学習環境……私たちにできることを考えてみるが特効薬的なアイデアは思いつかない。子どもの前でマスクをつけるかつかないか、これから育てゆく看護職がこの小さな選択に意義を見出せるかは学士課程での教育にかかっているように思う。
